

第一章

「なあー、命！今日、クラブ行くだろ？お前が好きなDJが回すらしいぞ！」

「ふーん……。ねえ、樹ちゃんも行く？」

「へ…!？」

大学の講義が終わり、中庭のベンチで手作りの蒸しパンをおやつとして食べていた大春樹（おおはる・いつき）は、自分の肩にコテンと頭を預けて棒キャンディーを舐めているダウンー系美人の男の顔を慌てて見返した。

「ク、クラブですか!？いいや、わ、私はそういうところはちよつと緊張しちゃうので…。椎葉君が好きな人に会えるんだったら良かったですね！楽しんできてください！」

樹がにっこりと笑いながら言うと、命は視線を上げて樹の顔をじーじーっと

見つめてきた。

「あ、あの…椎葉君？」

「…なんか用事あんの？」

「あ、こ、これからですか？じ、実はですね！近くのスーパーの月一半額セールでして！卵が激安なんですよ！おひとり様一パックまでなので、どうしてもゲットしたくて！」

「ふーん…」

また樹の肩に頭を預けた美人系ダウンイーケメンギャルこと、椎葉命（しいば・みこと）が、真っ黒に塗った自分の爪を眺めながら、舐めていたキャンディーをガリガリと砕き始める。そして、ごくりと喉ぼとけを動かし、全て飲み込んだ。

「じゃ、行こっか」

「へ？あ、ああもうクラブに行くんですか？行つてらっしゃい」

「命、行こうぜ！お前が来るなら来たいって女の子、めっちゃくちゃ多くてさあ
〜！」

友人らしきおしゃれな男が命の肩を抱こうとするが、スルリとかわされ、た
たらを踏んでしまっている。

「触るなよ」

「わ、悪い……。じゃあ行こうぜ」

「今日は用事あるから行かない。樹ちゃん、その蒸しパンちょうだい」

「え……？わ、わわ！」

「ほら、卵買いに行くんでしょ？売り切れる前に行くよ」

ふわあと大きく口を開けてあくびをした命が、樹の手を引っ張りゆったりと
歩き出す。

「命……！なんでだよお！」

後ろで友人が頭を抱えて嘆いていた。

椎葉命。有名国立大学法学部2年。身長182センチ。口元の黒子がセクシーと評判の気だるげダウナーギャル。女性よりも美しい顔と程よく締まった筋肉を持ち合わせた神が造りたもうた芸術品。緩い口調で穏やかだが、誰にも心を開かず、一線を引いている。

そんな設定モリモリのとんでもなくモテる男に、ショートカットで特に特徴のない顔に身体つきの樹はいつのまにかとんでもなく懷かれてしまっていた。

「ふー、椎葉君のおかげで2パックもゲットできました！本当にありがとうございます！」

エコバックに入った卵パックを見てホクホク顔の樹が、隣を歩く命にペコペコと頭を下げる。命は無表情で、先程のスーパーで新たに買った棒キャンディを舐めていた。

「別にいいよ、これくらい。ほかに買うものなかったの？」

命がコテンと首を傾げる。さらさらの黒髪が風に揺れて、命の長いまつげもふるりと揺れる。

（首を傾げるだけでこんなに絵になる人も珍しいなあ…）

樹が思わず命に見惚れていると、命の口角が少しだけ上がった。

「ん？どうしたの？」

「い、いえ！何でもありません！」

樹は慌てて前へ視線を戻し、早歩きで先を急ぐ。その後ろで命はクスッと笑い、口の中で飴に舌をレロォ♡と這わせていた。

「あ、あの、ここで大丈夫ですから」

「最近物騒だし、家の前まで送るよ」

「ほ、ほんとに大丈夫ですから」

樹は自宅アパート前の公園のベンチで命と押し問答をしていた。

（椎葉君にアパート見られたくないっ！）

樹はその一心なのだが、なぜここで別れようとしているのか分からないという顔をしている命が、全く折れてくれないのだ。

「ここからすぐ近くですし、私のこと襲うような人なんていないですから！」
樹はヘラヘラと笑う。実際、樹の身長は167センチと女性にしては高めで、肩幅も広く、髪が短いこともあって、遠目で見ると、小柄な男性に見えないこともない。これまでの人生で、男性に間違えられたことも何回かあるくらいだ。

それを踏まえて言った台詞だったが、命は眉間に皺を寄せて黙り込んでしまった。

「あ、あの…、ほんとに今日はありがとうございました。良かったら後日お礼をさせていただきます。…せっかく椎葉君の好きなDJさん？が来てたのに、ごめんなさい」

樹は深々と頭を下げ、踵を返す。

「ほんとにそう思ってる？」

「ひゃっ！」

突然ぐいっと手首を握られる。そしてそのまま、人質のように手を上に引っ張られてしまった。

「椎葉君…？きゅっ！」

そのまま腰に片手を回され、抱き寄せられる。至近距離に命の美しい顔面が

あつて、樹は思わず顔を真っ赤に染めてしまった。

「し、椎葉君っ！は、離してください…っ！」

樹が必死に身を振るが、命の体はビクともしない。

（椎葉君、スラッとして細身なのに、こんなに力があるの…!?）

必死にあがいても命の拘束は緩むどころか、逆にどんどん強くなっていく。

「ねえ、質問に答えてないよ？本当に襲われないと思ってるの？」

「やあ…っ！」

命が樹の耳元で低く囁く。樹はぎゅっと目をつぶって情けない声を上げた。

「もう…許してくださいさっ…椎葉くん…、怒らないで…っ」

樹がカタカタと震えているのを見て、命は小さなため息を吐いて拘束を解い

た。

「ほら、男には敵わないでしょ？何かあってからじゃ遅いんだから、家まで送

つてく。いいよね？」

「うう…」

「返事は？」

「分かりましたあ…」

樹がしょぼしょぼとした顔をしたまま頷く。

「…そのかわり、笑わないでくださいね？」

「何を笑うの？」

「色々です！色々！」

「分かった。笑わない」

命が真面目な顔で頷いた。

「これ何？なんで上から柿が吊るされてるの？」

「ねえ、キッチンに草が置いてあるけど？え？食べ物？カイワレ？」

「洗濯機が廊下に置いてあるの初めて見た」

「こんなことなら笑われた方がマシでした!!」

「この干し柿美味しいね」

「ありがとうございます！」

樹は四畳半のワンルームの部屋のちゃぶ台にあぐらをかいて、自分が作った干し柿をもぐもぐと頬張っている命に熱いお茶を差し出した。わざわざ自宅まで送ってくれた命をそのまま返す訳にも行かず、社交辞令で「お茶でも飲んでいきますか？」と聞いたのだ。錆だらけの鉄骨階段に、昭和に逆戻りしたかのように古い、畳しかないアパート。そんな自分の部屋を見れば、いつもおしゃれで高そうな服を着て、よく分からないけれどブランドものの指輪やピアスを

付けている命は顔を顰めて帰ってくれらるだろうと思ったのだ。しかし、その予想とは反対に、命は少しだけ頬を赤く染めて「飲む」と頷いたのだ。

「お茶も美味しい。ありがとう」

「いえ……」

樹はもぐもぐと無表情で干し柿を食べ続ける命を観察する。いつも淡々としていて、めったに感情を見せないと言われている命が、まるで子供のように一生懸命口を動かしているのを見て、樹は頬が緩みそうになる。そして、慌てて我に返った。

（か、勘違いしたらダメ！椎葉君は、ただ、毛色の違う野良犬に一時的に興味湧いてるだけなんだから！）

「ちょっとお手洗い行ってきます」

樹は命を視線から外して立ちあがり、洗面所へ向かう。手を洗った後、樹は

鏡で自分の顔を見た。自分の平凡な顔を見れば見る程、命が特別に麗しく、選ばれた側の人間であることを痛感してしまうのだ。

樹は児童養護施設出身だ。親の顔なんて知らない。けれど、優しい施設の人たちと、一緒に生活する子供たちと元気に育ってきた。みんな仲良しで、たまに喧嘩をするものの、穏やかに暮らす日々だった。

児童養護施設に無駄な金などない。いつだって節約を意識し、欲しい物があってもお下がりがりしかもらえないこともあった。余計な物にお金をかけることはできないのだ。

できるだけお金をかけずに暮らす――。そんな生活が当たり前だった樹は、誰にもバレないように「夢ノート」なるものを作っていた。大人になったら、お金が貯まったらやりたいことをリストアップしたものだ。

いっぱい勉強して、いい大学に入って、いい仕事に付けばお金持ちになれる。

そう信じて必死に勉強してきた樹は、有名国立大学の奨学生として入学、弁護士になるための道を歩み始めることができたのだ。ただ授業料は免除されているものの、施設を出て一人暮らしを始めた樹に家賃だのなんだのの生活費が重くのしかかる。バイトをしながら生活している樹は、何もかもを切り詰めて生きているのだ。

一方で、命は全てを持っている男だった。実家が金持ちで、これまでの人生でお金に困ったことはない。顔もスタイルも良くて、これまでの人生で友人にも女性にも困ったことはない。頭も良く、センスもいいので、これからの人生でも困ることはないのだろう。

どう考えても樹と命の人生が交わるはずはないのに。幸か不幸か、そんなことが起きてしまったのだ。

「椎葉君、申し訳ないのですが、講義中は……その指輪を外してもらえませんか？」
多くの学生で賑わう大学の食堂で、樹は無表情で激辛担々麺を頬張る命を見下ろして言った。命はもぐもぐと口を動かしながら、ジーっと樹を見つめている。命の隣にいる友人らしい、ちよつと顔が怖くてやけに身長が高い、命と同じくらい顔が整っている男性もまた、命よりもさらに真っ赤に染まった担々麺を頬張りながら樹を見ていた。

「あ、あの……聞こえておりますでしょうか？」

樹が恐る恐る言うのと、命はやはり無表情のままにコクリと頷いた。そしてゴクリと麺を飲み込み、水を飲んでまた樹を見た。

「大春樹さん？」

樹は、一度もまともに話したことがないにも関わらず、自分の名前を知って

いる椎葉に驚いた後、ゴホンッと咳をして話を戻した。

「そうです。同じ講義を受けている大春と言います。…失礼かもしれないんですけど、指輪が机に当たってカチカチッって講義中にずっと音が鳴ってるんです」

「えつと…これのこと？」

命が自分の指にはまったシルバーの指輪を指差す。樹はコクリと頷いた。

「ああ…そうだなあ」

命が思案顔で黙り込むと、命たちに群がるおしゃれな友人たちが文句を言い始めた。

「はあ？別に命が外す必要ないだろ？てか、あんた何？いきなり失礼じゃない？」

「あんたが授業に集中できてないからうるさく聞こえるだけでしょ？人のせい

にするのやめたら？」

「……教授の声がうまく聞こえないんです」

樹は震えそうになる手を必死に押さえつける。

「はぁ？俺たちは聞こえてるけど？……てか何？もしかして命に話しかけたかっただけだったりする？」

「あゝ、なるほどお。……こんなやり方で仲良くなろうとするとか恥ずかしくないの？」

「……私が話してるのは椎葉君です。は、外していただけますか？」

「だからぁ！」

「待って。……ごめん、迷惑かけて。外すよ」

「……ありがとうございます。では」

命が友人たちを止め、指輪に手を掛ける。そして、それをゆっくりと外し、

テーブルの上に置いた。命の隣にいる友人の男性はなんだかニヤニヤして命を見ていた。それを見届けると、樹はペコリと頭を下げて食堂から出て行く。早足で中庭まで来た樹は、人のあまりいない場所にベンチを見つけ、そこに座り込む。

すると、「樹ちゃん！」と声を掛けられた。樹は引きつっていた顔を笑顔に戻し、顔を上げる。

「杏ちゃん。だ、大丈夫だったよ。指輪、外してくれるって」

「ほ、ほんと！本当に言ってくれたんだ、ありがとう！」

樹に駆け寄って来たのは、大学に入ってから友人の道脇杏（みちわき・あんず）だった。樹と違い、身長が低く、華奢で守ってあげたい女の子の代表格のような女性だ。引っ込み思案で友人が少ない杏は、樹を頼ることが多い。そして今回、杏が泣きそうな顔で「命君の指輪の音が気になって講義に集中でき

ない」と言い出したのだ。樹は「自分で伝えてみたらどうか」と提案したのだが、杏はウルウルとした瞳で「前に付き合った人がシルバーの指輪をしていて、不機嫌になるとテーブルを叩いてあの音を出していた。自分で言うのは怖い」と縋り付いて来るのだ。しょうがないので、自分が伝えたと杏に言うのと「変に思われたくないから、樹がうるさいのが嫌だということにして欲しい」とまた懇願される。断りたい気持ちはやまやまなのだが、あのウルウルとした瞳で見つめられると、樹も無下にはできないのだ。そうして、樹はあの人気者の命に、大分失礼なお願いをしたという訳だった。

「椎葉君、分かったって言ってたし、あの音も聞こえなくなると思うよ」

「そっかあ、ありがとう！樹ちゃんがいてくれて本当に助かるよ！これからずっと友達でいてね？」

「うん、もちろん」

杏が嬉しそうに笑って去っていく。それを見届けた後、樹はゆっくりとベンチにもたれかかり、深いため息を吐いた。

「ふうー」

吐息が震える。

「怖かったあ…」

樹だって怖かった。あんな人気者で、体も大きい男性に意見するのは緊張するのだ。けれど施設にいた時から年下の子に頼まれ事をされることが多かった樹は、なかなか断れない性格になってしまった。

「でも…杏ちゃんがこんな怖い思いしなくて良かった」

あんなに小さい女の子が命のように大きい男に意見するのはなかなか難しいだろう。

「はあ…疲れた」

「ねえ大春さん」

「ひっ！」

突然下から声を掛けられ、樹は慌ててベンチから飛び上がった。

「大丈夫？」

「し、椎葉君!？」

地面にしゃがみ込んで俯いている樹の顔を覗き込んでいたのは、先程自分が理不尽な文句を言った命だった。

「あ…、えっと、さっきは…」

（も、もしかして文句言いに来た？お前みたいな芋臭い女が僕に意見すんじゃないーって!？）

真っ青になった樹は、黙ったまま自分を見ている命を放置して、自分の鞆の中をこそごとと漁り始める。すると、中から今朝手作りしてきた蒸しパンを見

つけた。

（て、手作りのものとか食べないよね……！ど、どうしよう、でもほかに何かあげられるようなものは……！）

「ねえ」

「ひっ！」

無表情の命が、樹に向かって手を伸ばしてくる。その行動で完全に命が怒っていると思った樹は、その手の平に蒸しパンをむぎゅうつと押し込んだ。

「こ、これで勘弁してくださいッ!!今朝作ったので、腐ってないですよー！」

そう言い捨てて、樹はぴゅーっとその場から逃げ出したのだ。そのせいで、命がどんな顔をしていたのかも知らずに。

翌日、樹は講義室の一番前の席で頭を抱えていた。

（あゝ、なんで逃げちゃったんだ。ちゃんと話をすれば良かったのに。突然

手作りの蒸しパン押し付けて逃げたヤバい女になっちゃった！指差されて笑われたらどうしよう！」

グルグルと自分の思考に囚われていた樹は、隣の席に誰かが座ったことにも気が付かない。

（あゝ、今日もう一回謝る？でもそれもなんかおかしいよね！）

「ねえ」

（そうだ！講義の合間にお詫びの菓子折りでも買いに行く!?でもそんなもの渡したら、あのオシャレな人たちに『また命狙い?』とか言われる?）

「ねえ、蒸しパンないの?」

（じゃあこっそり渡すとか…?それだとさらに怪しいか!）

「ねえねえ、蒸しパンは?」

「はい！蒸しパンね。今日はサツマイモが入ってるよ」

「うん、ありがとう」

「詰まらせないようにちゃんとお茶も飲んで」

「持っていない」

「じゃあ鞆の中の飲んでね！」

「うん」

（私の蒸しパン、子供たちに人気だからまた作ってきって施設の職員に言われてるんだよね。次の休みに行こうかなあ）

そんなことを思いながら、樹は鞆からティッシュを出して、自分の蒸しパンを頬張っているであろう施設の子供の口回りを拭こうと隣を向く。そしてハタと気付いた。

ここが施設じゃなくて講義室だったことに。

「ん？拭いてくれるの？ありがとう」

そして、隣で子供のように蒸しパンを頬張っているのは、命だったことに。

「んぎゃあ！」

「すげえ悲鳴」

いつの間にか命の隣に座っていた命の友人のデカ男が頬杖を付いてクスリと笑った。それを聞いて、樹は真っ赤になってしまう。

「ご、ごめんなさい」

小さく縮こまってしまった樹を見て、命がずっと目を細めると、友人の頭を遠慮なく殴りつける。

「いでっ！」

「ごめん、こいつノンデリなんだよね」

「お前に言われる筋合いねーよ。すまん、バカにした訳じゃないんだ」

「あ、いえ…」

友人の名前は東雲蜜（しののめ・みつ）というらしく、命とは系統が違う垂れ目の色男だった。

（イケメンはイケメンと友達になるんだなあ…）

樹が蜜をぼんやりと見つめていると、命の手がすつと伸びてくる。

「ねえ、お茶くれないの？」

「へ？」

命が樹の服の袖をちょいちょいと引っ張って注意を引いて来る。

「あ、えっと…」

樹が言葉に詰まる。先ほどは、命を子供だと勘違いしていたからの発言だったので、今はもう自分の水筒に入ったお茶を目の前のキラッキラな顔面をしたダウンーギャルに渡す勇氣などない。

「えっと…お茶はお家に忘れてきて…」

「鞆の中から水筒はみ出てるよ？」

「ぐっ！」

命が頬杖をつき、樹の鞆を指差してくる。

「ど、どうぞ」

「うん、ありがとう」

命が自分のタンブラー型の水筒からお茶を飲んでいる。

（…これって間接キスにならない？）

樹は真っ青になってまた頭を抱える。

（またあのお友達たちに文句言われる！）

「美味しかった。ありがとう」

「それ差し上げます！」

「え？ いいの？」

「ぜひ貰ってください！」

「ありがとう」

（あ！でもあげたらあげたで貢ぎ物で気を引こうとしてるとか思われるの、これ！）

「難しいよお……」

ぶつぶつと独り言を呟く樹を、隣で頬杖を付いた命が優しく目を細めてずつと眺めていたのだった。

その日からだ。命が樹の周りをチヨロチヨロするようになったのは。

いつも後ろの席で講義を受けていた命は、なぜか最前列の樹の隣に座るようになった。毎朝、「おはよお」とゆったりとした口調で樹に挨拶をして、当たり前のように樹の隣に座ると、その肩にコテンと頭を預けて、5分程グーグーと

仮眠をし出すのだ。そしてその5分間、樹が全く動けずにいると、いつのまにか命の友人の蜜がやってきて、「ほい」と樹にコーヒーを手渡して、命の頭をボカッと叩いて起こしてくれるのだ。

「いた…」

「いつまで寝てんだ。大春さん困ってんぞ」

「困ってるの？」

「えっと、い、いや…」

樹が言葉を濁すと、命はきょとした顔をして、ずっと樹の言葉を待つのだ。樹はゴクリと唾を飲み込み「そんなこと…ないですけど」と答えるしかない。すると命はへにやりとまるで少女のように美しい顔を綻ばせるのだ。

「うう…ダメだ、美しさに負ける」

「大春さん、こいつの顔に負けてたら何もかもこいつのペースになっちまう

ぞ？」

蜜はその怖そうな見た目からは信じられない程に熱烈にアプローチしているという同じ大学で年下の女の子に律儀にメッセージを送っているようで、嬉しそうに顔を緩ませている。

（顔がいい…）

二人が並んで座っていると、まるで少女漫画の世界のようだ。

（なんで椎葉君、私なんかについてくるんだろう…）

樹は自分が作った蒸しパンを咀嚼している命を盗み見る。

（おもしれー女…とかいう感じで女性に興味を持つようなタイプには思えないけど…）

ぼんやりしていると、命がこちらに視線を向けてきた。そして自分が食べている蒸しパンをじっと見つめると、それを少しだけ割って、樹へと差し出して

くる。

「お腹空いてた？全部食べようとしてごめん。あーんできる？」

「へ？い、いや、お腹は空いてないから大丈夫で……！」

「ほら、あーんだよ。あーん……！」

「んむう！」

命が樹の唇を親指でスリッ♡と擦る。そんな行為に驚いてしまった樹が思わず口を開くと、命が目を細めてそこに指を押し込んだ。

「んむう!？」

「ほら、ちゃんと開けてないと僕の指、嚙んじゃうよ？」

「んむう……ん……んう！」

「……口、開けて？」

「あ、開けるからあ！」

「うん…、言い子だね。はい、どうぞ」

「んぐっ！」

口の中に蒸しパンをほうり込まれた樹は真っ赤になってしまった顔を隠すように俯きながら、必死に顎を動かす。

「おいし？」

「おいひいです！」

自分で作ったので当たり前だという気持ちになり、樹は顔を上げて命を睨みつける。

「良かったね」

「っ！」

そこで命の嬉しそうな顔を見て、また何も言えなくなってしまうのだ。

「はあ…、疲れた」

大学が終わった後、深夜まで居酒屋のアルバイトをしていた。

「明日は休みだから、ちょっとゆつくりしよう」

スマホで時間を確認すると、時刻は午前0時を回っていた。

「さむう…」

真冬の冷たい風が樹の体を冷やす。長年使い続けているダウンジャケットのチャックを上まで締めて、樹は歩き出した樹は、スマホにメッセージが来ていることに気付いた。

「ん？あれ…椎葉君だ」

メッセージは最近、半ば押し切られるような形で連絡先を交換した命からだった。3時間前に命から一言「今日時間ある？」と連絡が来ていた。

「もうこんな時間だし、流石に寝てるかなあ」

でもこの前はDJだのクラブだのの話をしていたので、もしかしたら命にとってこの時間はまだ活動時間なのかもしれない。

「…寝てたら連絡帰ってこないだろうし」

そう思い、樹は「今までバイトでした。すいません」とだけメッセージを送り、スマホをポケットに入れようとした。しかし、すぐにスマホから通話の着信音が聞こえてきて慌てて応答ボタンをタップした。

「もしもし！」

『もしもし？』

「あ、あの、椎葉君？」

『…うん、椎葉君だよ』

「っ…あ、うん」

なんだかいつもより命の声が甘いような気がして、樹は息を飲んだ。心臓が

変な音を立てて激しく脈打ち始める。

「あ、あの！何か用事でしたか？すいません、今の今まで居酒屋でバイトしてメッセージに気付かなかったんです」

『そっか。バイトお疲れ様』

「あ…えっと、はい…。ありがとうございます」

疲れた体に命のゆったりとした口調と、じんわりと体に染みこんでいくような低音が心地いい。

『今から帰るの？』

「…うん」

バイトのほか、一週間の疲れが溜まりに溜まっている樹は、外にいるにも関わらずちょっとだけ眠くなってしまう。そのせいで、いつも命には敬語で話しているにも関わらず、碎けた口調で返事をしてしまう。電話口の向こう

からは数秒だけ黙った後、椅子から立ち上がる音が聞こえた。

『…樹ちゃん、眠いの？』

「んゝゝ、眠くないよ？」

ポヤポヤとした口調で返事をする、命がクスクスと笑った。

『眠そうだよ、樹ちゃん。僕が樹ちゃんって呼んでるのも気付いてないでしょ？』

「んゝゝ」

命の甘やかすような声が耳朶をくすぐって、樹は変な声を出してしまう。

『こおら、そんな声出さないの。まだ外なんでしょ？』

「うん…、今帰ってるところ」

『今どこなの？』

「えっと…大学の最寄り駅の近く」

『ん、分かった。迎え行く』

「迎え……？」

ぽてぽてとゆっくり歩きながら樹が首を傾げる。

「なんで迎え……？」

『なんでって……、樹ちゃんが可愛いから』

「可愛いから……？」

『うん、……可愛いから』

命が真剣な声で変なこと言うので、今度は樹がクスクスと笑ってしまった。

「ふふ……、椎葉君は可愛い女の子だったら誰でも迎えに行くの？」

ちよつと意地悪な質問だっただろうか。眠気でほとんど回らない頭で樹が尋ねる。

『行くよ。可愛い女の子の迎えには必ず行く』

「あはは！……チャライね、椎葉君」

自分で聞いたくせに勝手に残念な気持ちになった樹は地面を見ながら歩を進める。

「流石、椎葉君。そうやって女の子のこと口説いてるの？」

樹の言葉に、命はまるで心底大好きな彼女を甘やかしているような声音で返事をした。

『僕が可愛いって思う子は樹ちゃんだけだから。…だから樹ちゃんのことはずぐに迎えに行くし、口説くよ』

「へ…?」

予想もしていなかったことを言われて、樹の足が止まる。

『今どこ?すぐ迎えに行くから』

「も、もう家なので結構です！」

顔を真っ赤にした樹は勢いよく命との通話を切ってしまった。はあはあと荒

くなっている息を整えながらスマホの画面を見つめていると、ピコンという間
抜けな音とともに命からのメッセージ通知が画面を光らせる。震える指でそこ
をタップすると、命から恨めしそうな猫のスタンプが送られてきていた。

「ん…ふふ…」

その顔が命の今の感情を表現しているように思えて、樹は思わず笑ってしま
う。

「ふふ…帰ろう」

先ほどまで冷たい風で冷え切っていた体は、命のおかげでぽかぽかに温まっ
ていた。



そんな命との日々を思い出してぼーっと顔を赤らめていた樹はハッと我に返り、慌てて冷たい水で顔をバシャバシャと洗った。

「…はあ、椎葉君と一緒にいると心臓に悪い」

恨めしげに呟きながら、樹が居間に戻る。するとそこでは命がテーブルに突っ伏して眠ってしまっていた。

「あれ、椎葉君？」

樹が傍に寄って体を優しく揺するも、命が起きる気配はない。

「えっと…どうしよう」

このままにしておいてもいいのだろうか。用事があつたら困るのではないだろうか。

「ん…」

けれど気持ち良さそうな顔でスヤスヤと眠っている命を無理やり起こす氣に

もなれない。

「ちよつとだけ：寝かせてあげよう」

樹はベッドからブランケットを取ってきて、命の肩に掛けてやる。そしてで
きるだけ物音を立てないようにして、家事を進めることにした。

たまっている洗濯物を外の廊下に置いてある洗濯機の中に放り込んでスター
トボタンを押す。そして家に戻り、夕食の準備を始める。

「卵いっぱいだし、今日はオムライス！」

冷蔵庫から玉ねぎとウィンナーなどの食材を取り出して、手早く作っていく。

「椎葉君、食べるかな…」

味付けをしながら小さく呟いた時。

「食べる」

「ひゃあ！」

突然背後から耳元で囁かれ、樹の体がビクリと跳ね上がった。慌てて振り返ると、大きなあくびをしている命が後ろから樹に覆いかぶさっていた。

「し、椎葉君!? 起きたの?」

「うん、おはよう」

「お、おはよう」

命ととんでもなく密着していることに気付いた樹は慌てて前に向き直る。

「あ、あの、た、食べるって…」

「うん、食べたい。ご飯作ってるんでしょ?」

「っ!」

スルリ♡と命の両腕が樹のお腹に回される。そして、肩に顎を乗せられ、後ろからフライパンを覗き込まれた。

「美味しそう。食べたい。お腹空いた」

「で、でも：ウィンナーと玉ねぎしか入ってないよ？」

「それだけあれば十分でしょ？ちゃんとお金払うから」

命が顎をぐりぐりと樹の肩にめり込ませてくる。

「ふふ、お金なんていらないよ。自分の分を作るついでだから。それよりも、椎葉君、今日は予定とかない？これから飲みに行ったり、友達と遊んだりする予定があるなら少なめにするけど？」

「ない」

「分かった」

命が短く断言するのを聞いて、樹はお皿にぺちぺちとケチャップを盛り付けていく。

「もうちょっとでできるから、テーブルで待っていてくれる？」

「うん、分かった」

コクリと頷いた命が、離れる前に樹の耳元で囁く。

「ありがとう。優しいね、樹ちゃん」

「っ！ちよ、耳元で話さないで」

顔を真っ赤にして怒る樹を見て、命は少しだけ嬉しそうに笑った後、大人しく離れていった。

（これだから一軍男子は…！）

樹は心の中でぷりぷりと怒りながらも、手早くフライパンで薄焼き卵を作り、ご飯の上にスリとスライドさせて乗せた。そして自分の分もちやつちやと作り、お皿を二つ持ってリビングへと向かう。

「椎葉君、できたよお…って、だめえええ！」

テーブルにオムライスを置いた樹は、命が自分が書いた夢ノートをペラペラとめくっているのを見て、慌てて駆け寄り、それを取り上げた。

「み、見た!？」

「見てないよ」

「見てたでしょ!!」

「見たよ」

「なんで見るの!!」

「樹ちゃんのこと知りたくて」

「うううう…」

何が悪いのか分からないというような顔をして、コテンと首を傾げる命を見て、樹が大きなため息を吐いた。

「とにかく…ご飯食べましょうか」

「美味しい。料理上手だね、樹ちゃん」

「ありがとうございます…」

二人で向かい合ってもぐもぐとオムライスを食べる。

『自分の家で彼氏にご飯を作ってあげる』、達成できた？」

「へ？」

「ノートに書いてあった」

「忘れてえ…」

樹がテーブルに突っ伏して唸る。命は無表情でもぐもぐと口を動かしていた。

「椎葉君、意地悪だ…」

「意地悪じゃないよ」

「意地悪だよ！そうやって…私の夢ノートのこと揶揄ってくるでしょ！」

「揶揄ってない。たくさん夢があるのはいいことだと思うけど？」

樹がゆっくりとテーブルから顔を上げると、すでにオムライスを食べ終わっ

ていた命が頬杖を付いて自分を見下ろしていた。

そして、命が身を乗り出してきて、樹の両頬に手を当てると、ちゅ♡と唇を重ねてきた。

「は…え？」

（え…あ、い、いま、キス…、キス…した！）

樹が自分の口を手で抑えて、ズリスリと座ったまま後ずさりする。命はテールを回ってゆっくり樹に近付いて来た。

「あ、あの…、し、椎葉君…っ！」

樹の背がキッチン下の戸棚に当たる。それに気を取られている間に、自分の顔の両脇に命が手をつけて、樹を逃げられないように囲い込んだ。

「あ…う…」

「樹ちゃん…」

「ひょえ！」

(またキスされる!?)

樹がぎゅうっと目をつぶるが、いつまでたっても唇にキスの感触はやってこない。樹が目を開けると、命がきよとした顔で首を傾げていた。

「どうしたの？」

「どうしたのって…だって、キスしてくるから…」

『『カッコいい男の人とキスしたい』』

「へ？」

「あのノートに書いてあること、全部叶えたいんでしょ？僕が手伝ってあげるよ」

「へ…？あ、あの…」

「なあに？自分で書いたのに、内容忘れちゃたの？」

命がすくつと立ち上がり、樹の夢ノートを取って来ると、目の前ではらりと開く。

「ほら、ここに書いてある。カッコイイ男の人とキスがしたいって」

「あ……」

命が指さしている場所には確かに自分の字で、そう書いてあった。

「僕がこの夢ノートに書いてあること叶えるお手伝いしてあげるから」

「え、えつと……な、なんで？」

樹がおずおずと尋ねると、命が目を細めた。

「……なんでだと思う？」

「えつと……、む、蒸しパンのお礼……とか？」

ヘラリと笑ってそう言うのと、命は真顔で黙り込む。

「あ、えつと……その……ひ、暇だから……とか！」

「…蒸しパンのお礼ってことでいいよ」

「あ…うん」

樹はコクリと頷いた後、赤くなった頬を隠すように俯く。

（あ、危ない…。私のことが好きだからなんて調子乗ってること言うところだった！そんな訳ない！さすがに干し柿カイワレ女をこんなイケイケギャルが好きになる訳ないことは分かる！）

樹の顔からやつと熱が引いて来た時。

「それで？僕がお手伝いしてもいいの？」

「あ…で、でも、くだらないことばっかりだと思うし。蒸しパンのお礼なんていいから…」

「一宿一飯の恩は返したいの、僕」

「そっか…、なら…簡単なところはお願いしようかな…」

樹が笑うと、命の瞳がきらっと光ったように見えた。

「そっか…。じゃあ早速しようか」

「え…？」

ノートを丁寧に床に置いた命が、また樹を自分の腕の中に囲い込む。そしてグッと体を近付けてきた。

「ちょ、ちょ、ちょっと待って、椎葉君っ！」

樹は必死に命の胸板に手を置いて押し返そうとするが、その体はビクともしない。

「いくら僕が細身に見えても男だから。樹ちゃんは敵わないよ。それに…」
命がゆっくりと上半身の服を脱いでいく。

「別にガリガリな訳でもないし」

「ひっ…!？」

脱いでTシャツ一枚の姿になった命の体はとんでもなく筋肉質で、腕にはバキバキの血管が浮き出ていた。

「な、な、な……っ！」

「樹ちゃん……、ねえ、夢ノートとかすっげえ可愛いことしてんの、ほかの男には言っていないよね？」

「んう♡」

命がスリスリ♡と樹の首筋に顔を擦り付けてくる。命の熱い吐息が首筋をくすぐり、樹はきゆう♡と体を丸めた。

「はは♡…僕ねえ、記憶力いいの。樹ちゃんが夢ノートに書いてたこと、ぜんぶ覚えたよ？」

「っ…意地悪う…」

樹が両手をぎゅうっと握りしめて俯こうとする。それを防ぐように、命が下

からすくい上げるようなキスをした。

「んう♡…ふう…んっ♡んん♡」

「はあ…んっ…んう♡…お口…開けられる…?」

「んむうう!」

樹が顔を真っ赤にしてブンブンと首を振るのを見て、命が心底嬉しそうに笑った。

「ただあーんってお口開けるだけでしょ?…樹ちゃん、頭良いんだから、ちゃんとできるって。ほおら」

「や…ちが、そうじゃなくて…な、なんでこんなこと!」

樹が目を白黒させて抵抗していると、命はきよとした顔で首を傾げた。

『『カッコいい男の人とキスしたい』て書いてあったでしょ?』

「さっきしたよ!」

「たくさんした方が得でしょ？」

命が舌なめずりをして笑う。

「カッコいい男の人がいいんでしょう？僕…、カッコよくない？」

「っ！」

命が樹の顔を至近距離で見つめる。

「カッコいいって、いっぱい褒めてもらえるこの顔じゃ、満足できない？」

「違うの…、し、椎葉君…！」

「命って呼んで」

「んむう♡」

命がちゅうう♡と樹の唇に吸い付く。そのままハムハム♡と下唇を食んだり、「中に入れて」とでも言うように、舌先できゅっと締まった唇の隙間をノックしたりしてくる。

「んっ…んう…ふ…んう♡」

「はぁ…んう♡…強情…だなぁ…♡」

「ふ…や、やだぁ…椎葉君…っ♡もう、やめてえ…♡」

「やだだ♡…でも、僕の事、命君って呼んでくれるんだったら…今日はチューだけで終わらせてあげる」

「っ…み、命君…っ！」

「ッ♡はは…、命君、今日はチューだけにしてっ…言えるかなあ？」

「ひっ！名前呼んだら、いいって、言ったあ！」

「おーねがい、樹ちゃん♡」

「あう♡」

とんでもなく美しい男のおねだり顔に、樹は簡単にノックアウトされてしま
う。

「み、命君、今日は、ちゅー…、だけにしてえ…!」

「……、うん、分かった♡」

命が甘く目を細めた後、樹の額にキスをする。はふはふと息を荒げる樹をしばらく眺めていた命が、キスだけでぐにやぐにやに蕩けた樹の体を抱き上げた。

「んう♡ふう…っあ♡」

「ん…ん…っ…ん」

（命君の舌…、ちゅる♡って入ってきて、口の中、いっぱいぬこぬこってしてくる…♡）

命のモデル顔負けの整った顔面が至近距離にあり、樹はまじまじと観察してしまう。すると、長いまつ毛の下の瞼が開き、命の澄み切った瞳が現れる。

「ん…、どうしたの?」

「あ…」

命の優しい声音に、樹は思わずその綺麗でシミ一つない頬に手を伸ばしてしまった。

「…ん？」

命はその手に擦り寄ってきて、手の平にちゅう♡とキスを落とす。

「僕の顔、触りたいの？」

いつの間にか、ボスンとベッドの上に落とされる。ベッドの縁に腰かけた命が、身をかがめて、樹の顔を上から覗き込んだ。

「いい…の？」

ぼやあとしている樹が尋ねると、命はコクリと頷く。

「いいよ、樹ちゃんなら」

「ん…」

樹が両手を伸ばして命の両頬に手を当てる。そしてそこを親指でスリスリ♡

と撫でた。

「んっ…♡」

「あ…」

命がきゆう♡と目を閉じて、口から低くて艶のある声を漏らす。

「命…君…」

「ん…はあ♡…なあに？」

「あ…う…」

「…はは♡どうしたの…、そんな顔して…？」

「だって…だって…」

「ん？なあに？」

「命君が…すごつく…エッチなんだもん…」

「ふふ、僕がエッチなの…？」

命が垂れてくる髪を耳に掛けて樹に微笑みかける。

「うん…エッチ…だよお」

「なに、その声…。かあいーな…♡」

「ん♡」

ちゆる♡と音を立てて命の舌がまた樹の中に入って来る。

「はぁ…う♡ん♡う…っ…舌、絡めて…？」

「んっ♡ん♡う♡う♡♡んっ♡ん♡む♡♡」

（チュー、きもちい♡すごい…きもちい…♡♡）

「んっ…ふっ…はぁ…っおっと…」

舌を絡めるキスでジンジンと頭が茹ってきた樹は、知らず知らずのうちに命の顔を引き寄せて無我夢中でその唇を貪っていた。命は目元を赤く染めて、何も言わずにそのキスに応えてくれている。

「んむう♡んう♡ふぁ♡んうう♡♡」

「んっ…ふ…はぁ…んうっ…ん…ふーっ…んう♡」

目をぎゅうつと閉じて、必死に自分の唇に吸い付く樹を、命は目をすうつと細めてずつと見つめ続ける。

「っ…んう…っはう！」

ちゆるちゆる♡と舌を絡ませていた樹がゆっくりと目を開き、そこでやっとずつと顔を見られていることに気付いた。そして自分が命を襲っているかのようキスをし続けていることを自覚し、慌てて命の顔から両手を離す。

「ご、ご、ご、ごめんなさい！私、なんてことを…っ！」

「んっ…♡」

「あああ！命君、ご、ごめんなさい！」

ぼやあとした顔で口の端からタラリ♡と涎を流す命を見て、樹は真っ青にな

つてテーブルへと駆け寄り、ティッシュを何枚も持ってきて、命の口を拭いた。

「ご、ごめんなさい！こんな、汚くして…！」

「はあ…樹、ちゃん…♡」

「あ、ああ…、だ、大丈夫？ご、ごめんなさい、き、気分、悪い？」

「んっ…大丈夫」

「良かった…」

樹が自分のせいで乱れた命の髪を整えてやる。

「あ、あの…こんな…襲うような真似して、ほ、本当にごめんなさい！」

「ん…」

少しずつ頬の赤らみがなくなってきた、いつもの無表情に戻った命の前で、樹が土下座をキメる。

「あ、あの！ほ、ほんとに、何でもします！お、お金はあんまりないんですけど、分割で良ければ、ご希望の額をちゃんとお支払いしますので!!」

「んー、…何でも？」

「は、はい！もちろん！」

床に額を擦り付けながら樹が返事をする、命がベッドから立ち上がる音が聞こえた。そして下げている頭をツンツンと突かれる。

「あ…」

「顔上げて？」

「はい…」

樹が体を起こすと、しゃがみ込んでいる命がちゅ♡と樹に軽いキスをする。

「じゃあ、樹ちゃんの夢ノートに書いてること、全部、僕としよ？」

「はえ？」

「絶対ほかの人と一緒にしないで。夢は全部僕と一緒に叶えようね」

「えっと…」

「返事は？樹ちゃん？」

「は、はいっ！」

顎を持たれて上を向かされた樹が元気に返事をする、命が満足そうに微笑んだのだった。